



戦後50周年記念出版
語り継ぐ戦争体験
(平成7年発刊)
から抜粋

●昭和20年(中略)、当時私は看護学生として、東京の城南にある大学病院の寄宿舎におりました。

病院にも焼夷弾は投下され、火の海となりました。火の勢いは強く、婦長の指示のもと衣服のまま水をかぶりバケツリレーをしました。びしょぬれの衣服もすぐ乾いてしまい、何度も何度も水をかぶったり、池に飛び込んでぬらしたことを思い出します。

3月10日、東京大空襲により多くの生命が失われ、私の知人も何人が亡くなりました。東京は焼け野原と化してしまいました。

私のいた病院も、深川方面からの被災者がトラックで毎日運ばれて、病院は満床。廊下まで(空襲の)被爆者で人の通るすきさえないほどでした。運ばれてくる途中で死亡する者、息絶えて運ばれる者、区別もつかぬ状態で、死体は病院の車庫に安置されましたが、重なり合うほどでした。「水、水」「あつい、くるしい。看護婦さん助けて」等、断末魔のうめき声はまさに地獄絵そのものでした。(永遠の平和を願いつつ 中村千代さん)

●戦争がだんだん近づいてきて、空襲が多くなってきました。各家庭では庭に防空壕を掘り、そして壕の中へ食料や水や薬などを蓄え、山からうるいの葉を取ってきてはためておきました。うるいの葉はスマと混ぜて餅にして焼いて食べるのですが、スマは小麦の粉を取ったあとに残る種皮などの粉、つまり小麦の皮です。何もない時にはおいしく食べられるものです。また砂糖のような甘い物が全く無い時代でしたので、山へ行って松やにをつつついてなめたり、桑畑に入って桑の実を食べました。みんな甘くておいしかったものです。(戦争体験記 山田三郎さん)



◀市公式サイトで全文を読むことができます。

▼**防空壕**
(田村さん) 防空壕はそれぞれの家で、自分たちで掘りました。
(下田修さん) 立派な地下室ではなくて、穴を掘って上に丸太を渡して、むしろとかを乗せて土をかぶせる、その程度のものでした。だから爆弾とか機銃掃射でやられたら一発でダメだったでしょうね。
(下田明子さん) 疎開の人も入るので父が大きい防空壕を掘り

ました。空襲だつていうと、10人位そこに隠れるんですけど、ジメジメしていて変なおいにして、ホント嫌でしたねえ。
▲**浜名海兵団に入団**
(田村さん) 兄が2人戦争に行つて、私は家の農業を手伝っていました。その後、徴兵検査が早くなって、まだ18歳位だったけれど甲種合格というので、終戦の年の6月に浜名海兵団に入りました。これは当時、横須賀の軍港がダメになっていて、浜名湖の東側に浜名海兵団というのをつくったんです。



◀田村さんの手跡を基に建てられた石碑。羽中3丁目の奈賀児童遊園内にひっそりと建っている。裏面には羽村出身の戦没者の氏名が彫られている。

海兵団に入る前、羽村に青年学校ついでのがあって、そこで銃剣術が達者だったから、海兵団では銃剣術を教えました。海軍だから海岸ふちで訓練をするんだけど、海岸には下に防空壕を掘れないから、上に盛って作るんです。だから艦砲射撃(軍艦の大砲で砲撃すること)で海から狙われると命中率が高い。私の隣にいた人もそれでやられて戦死です。ピューッと音がするときは上を通るけれど、音がしないのは自分のところに落ちる。生きた心地がしませんでした。

▲**戦争を知らない世代に伝えたいこと**
(下田修さん) 今も世界中のどこかで戦争が起こっています。「戦う」というのは人間の本能なのかもしれないけれど、戦争は殺し合いだから絶対に起こしてはいけません、それを今も強く思いますし、子どもたちにも伝えたいです。
(田村さん) 今の人々には、世界を見る目を広く持つて、戦争なんかはない、平和な日を築いていってほしいです。

■戦争中の暮らし

(石田さん) 6年生くらいから、勤労奉仕をしょっちゅうさせられました。年寄りと女性ばかりになった農家の応援に、子どもたちが行くんです。勉強はそっこのけ。農家の手伝いに行くところ、おやつが出るのがあって、食べ物がない時代だったので、みんな大喜びでした。向こう山(浅間岳)を伐採して出た木の枝を年寄りが束ねて堰の向こうに積んでおいて、生徒が一把ずつ背負って、多摩川の浅瀬を渡って道路まで運び出したりもしました。
(下田修さん) 横田基地のあたりは陸軍整備学校で、飛行機があったんです。私は5年生だったと思うけれど、その飛行機を隠すための半地下の土手を作るんで駆り出されました。羽村から横田まで毎日歩いて行きました。



▶石田ハナ子さんの夫・故石田文司さんがシベリア抑留から帰還したときに身に付けていた衣服と。亡くなってしまった人の服を脱がせて、生きている人が着たという。上着のネームは全く知らない人の名前だそう。



▲インタビューの様子をYouTubeで視聴することができます。

茶の木の下で震えた機銃掃射

しもだ おさむ 下田 修さん (91) ・ あき こ 明子さん (89) ・ いしだ 石田 ハナ子さん (93) ・ たむら いさむ 田村 勇さん (98)



▲千人針。親族や近所の人などに一針ずつ玉止め(弾を止めるの意)を作ってもらい、無事を祈った。出征する人がお守りとして腹などに巻いた。(郷土博物館所蔵)

親の着物をほぐして作り直しました。2年生くらいの時、学校の講堂で、先生がもんぺのはき方やトイレの行き方を教えてくれましたよ。いつも防空頭巾をしょってましたね。
(石田さん) 学校に兵隊さんが寝泊まりしていて教室が使えるなくて、講堂で先生が、新聞記事を読んでくれたりしました。朝礼の時には、先生がタクトを振って軍歌を歌われました。兵隊さんの食料が届くと、羽村駅から倉のある所まで、子どもたち5人くらいでリヤカーで運びました。もちろんお礼なんかありません。
出征する人の見送りの列について、駅まで行ったこともありま。千人針も幾針か縫いました。

■食糧事情

(石田さん) 都会から食糧を買いに大勢来ました。お金がないから、着物と食べ物とを交換してほしい、ってね。小さい子を背負った人もいました。両親はそういう人をとてても気の毒がって、サツマイモをたくさんふかしておいて分けていましたね。

■空襲の記憶

(下田修さん) 警戒警報が出ると、学校は子どもたちを家に帰すんですよ。まず警戒警報が出て、そのあと空襲警報になる。グラマンっていう戦闘機は日本の海上にいる航空母艦から発艦する。近いから、警戒警報が出るとすぐ来るんです。

あるとき、警戒警報が出て「怖いなあ」と思いながら自宅に走って向かっていると、途中で、その辺の山の上に飛行機がひょいっと顔を出したんです。慌てて、茶の木の下に隠れた。茶の木は昔は塙の代わりだったんです。そうしたら、グラマンが「バリバリバリ」と機銃掃射してきましたんですよ。非常に怖い思い出しました。
今の西小学校のところにあつ